

## チョルカス *The Slap* に見るエスニシティと セクシュアリティの力学

湊 圭 史

### 序.

*The Slap* (2008) はオーストラリアを代表する人気作家クリストス・チョルカス (Christos Tsiolkas) の長編第4作である。メルボルン生まれのギリシャ系二世であるチョルカスは、第1長編 *The Loaded* (1995) で同性愛者のティーンエイジャーの性的遍歴をエスニシティを絡めつつ赤裸々に描いて注目を集めた (後に *Head On* という題で映画化 (1998; Ana Kokkinos 監督) された)。第3作 *Dead Europe* (2005) では、家族のルーツであるギリシャに渡った写真家が祖父が殺したユダヤ人の亡霊につきまとわれ自身も一種のヴァンパイアと化すというゴシック・ホラー的仕掛けによって、現在のオーストラリア人のヨーロッパへの視線を作品化し、作中に色濃く反映された歴史上のまた現在のヨーロッパにおける反ユダヤ主義によって賛否両論を巻き起こした。作者を反ユダヤ主義者とする批判は当てはまらないと思われるが、セクシュアリティとエスニシティを過度に詰め込んだ作風は、高度なエンターテインメント性と合わせて、この作家に「チョルカス現象 Tsiolkas Phenomenon」と呼ばれるほどの注目を集めると同時に、批評する者に最終的な価値決定をさせない複雑な仕掛けとして働いている<sup>1)</sup>。

本論では、*The Slap* を取り上げ、描かれた人間関係の中でエスニシティとセクシュアリティがどのように機能しているか、また、そのような機能を果たす社会的・文化的背景はどのようなものを考察する。本作でも性的要素は重要なテーマとして全体に散りばめられている。さらに、エスニシティや世代、性別の異なる8人の視点人物たちを用いて、各章が別の角度から同じ事件を検証するように構成されるという実験的な手法が用いられることで、エスニシティとセクシュアリティを巡るテーマはこれまで以上に多様な視点から新たな光を当てられている。ステレオタイプぎりぎりのところで造形された人物像によって、現代オーストラリアでいかにエスニシティが生活の全面に渡って問題化され、セクシュアリティの多様性と相まって、人々にどのような選択を強いるものとして表れているかを明らかにしたい。また、*The Slap* が世代間の意見の違いを視点をずらすことで明らかにすることで、オーストラリア社会のエスニシティとセクシュアリティを巡る現在の状況にどのような方向性を見出しているのかも検討する。

### 1. *The Slap* に見るエスニシティ

*The Slap* は8章から構成されているが、各章のタイトルが示すように、それぞれの章は別の視点

人物を使って描かれる。さらに、これらの人物がエスニシティと性別、世代を異にすることによって、また文体においては描出語法を多用することによって、それぞれの思考をうわべでは隠している偏見に至るまで抉るように描き出すことに成功している<sup>2)</sup>。あらすじを簡単に記せば、郊外にある家庭で開かれたバーベキュー・パーティーでわがままが過ぎた子供を大人の一人が「平手打ち (slap)」してしまい、その事件から友人・家族のあいだの信念や意見の違いが露わになる、というものである。そこに示されているのは、様々な価値観の平等という理念のもと、多様なエスニシティが混ざり合い、ぶつかる現場を生きることの困難さである。

第1章の視点人物ヘクター (Hector) はギリシャ系の2世、妻との間に二人の子供がいる公務員。バーベキュー・パーティーのホスト役として、事件後に妻と自分の親族たちの間で板挟みになる。第2章のアヌーク (Anouk) はヘクターの妻アイシャ (Aisha) の親友で、ユダヤ人のTVドラマ脚本家。ドラマに主演しているかなり年下で典型的オーストラリア人の美形俳優と恋人として付き合っている。第3章のハリー (Harry) は事件において子供を「平手打ち」した人物で、ギリシャ系、ヘクターの従兄に当たる。叩き上げの自動車整備工から財を成し、現在はビーチ沿いに高級住宅を構えている経済的成功者である。第4章のコニー (Connie) は白人の高校生で、オーストラリア人の父とイギリス人の母とのあいだに生まれてロンドンに育ったが、両親の死後メルボルンの叔母に引き取られて暮らしている。ヘクターの妻アイシャの動物病院でバイトをしながら、ヘクターと不倫関係になりそうな状況だったが、「平手打ち」事件の影響で改心したヘクターに別れを告げられる。ロージー (Rosie; 第5章) はハリーに叩かれた子供の母親で、アイシャとアヌークの西オーストラリア・パースにいた十代の頃からの親友である。ハリーを威勢よく警察に訴えるが、実は妻として母親としての役割と貧困生活によって精神的に追い込まれている。マノリス (Manolis; 第6章) はヘクターの父親でギリシャ系1世。同じく1世の友人たちが引っ越し、また亡くなっていく中で孤独を身に沁みて感じ始めている。アイシャ (第7章) は上記の通りヘクターの妻で、インド系2世の獣医。みなから頼られる冷静沈着な性格だが、ヘクターとの生活にはひそかに倦怠を感じている。リッチー (Richie; 第8章) はコニーの親友の白人男子高校生で、アイシャの動物病院で働く女性の息子。同性愛者であることはコニーにだけは打ち明けているが、高校生活には馴染めないでいる。

以上のように、視点人物として扱われる8人だけでも、ギリシャ系、ユダヤ系、白人 (オーストラリアではイギリスおよびアイルランドが出自のアングロ・ケルティックを中心とした北西ヨーロッパ系の人々を指す。The Slap では「オージー Aussies」「オーストラリア人 Australians」と呼ばれることもある)、インド系とエスニシティが分かれている。さらに他の登場人物には、ヘクターの旧友で現在はイスラム教に改宗したアボリジニであるビラル (Bilal) や、ハリーの知り合いで海賊版DVDの密輸入をしているヴェトナム人のサンジヴ (Sanjiv)、コニーの恋人となるアラブ系の同級生アリ (Ali)、アイシャがシンガポールのカンファレンスで不倫することになるアート (Art) などがいて、さながら人種と宗教の博覧会といった様相である。また、性別 (および性的嗜好)、世代、経済状況、教育の程度においても、様々な傾向が交錯して、現在オーストラリアの一都市におけるエスニシティを巡る状況を描き尽そうとしているかのようだ。

印象的なのは、人種・民族関係においてマジョリティがマイノリティを差別するという単純な構図があまり見られず、逆に、マイノリティの側がマジョリティに対して優越感を抱き、マジョリティの側がマイノリティに対して精神的コンプレックスを抱えるという状況が繰り返し描かれることだ。高校時代のビラルが恐らくアボリジニであることが理由でクラブ入店を拒否されたことなど、マ

イノリティ差別が前景化されることはあるものの、より印象的に焦点が当てられているのは、以下のような場面に表わされた独自の歴史や文化的背景をもたないマジョリティ（白人）へのマイノリティ側からの視線だ。

「シャミラって一体誰なのよ？」

「あなたも知ってるでしょ」アイシャがアヌークに思い出させた。「ビラルの奥さんよ」

アヌークは頷いた。アボリジニのイスラム教徒とその妻で白人のイスラム教徒。バーベキューの際には、どちらにも何を話していいのかさっぱり分からなかった。ロージーがああ夫婦を気に入る理由は分かった。三人とも自分たちの過去をすっぱり分かりやすく捨ててしまって、新しい全然違った肌を身につけたのだ。アイシャをちらっと見やると、自分とまったく同じことを考えていることが分かった。三人のまさに本物と言っていいオーストラリア人の経験をアイシャとアヌークは気の毒に思っていて、まさにそう思っているということ共有していたのだ。アイシャも私も、現実の過去を、現実の歴史を受け継いでいるのだ。ユダヤ人、インド人、移民。そのことそのものが何ごとかを意味しているので、わざわざあれこれをでっちあげたり、何者かであるふりをする必要は私たちにはないのだ。(Tsiolkas 71；翻訳は湊、以下も同)

ここでは、オーストラリアに近年渡ってきた者たちであるというかつては負い目となったかも知れない出自が反転して、自分たちの優位を示すものとなっている。「本物と言っていいオーストラリア人の経験」はアヌークやアイシャにとっては憐れむべきものなのだ。多文化主義が一般的な意識まで浸透したオーストラリアでは珍しくない意識のありようなのだろう。

対して、この作品に主だって登場するマジョリティである白人、とくに男性は、自信を喪失してアルコールや薬物に依存する弱い存在として表されている。その典型はロージーの夫ゲーリーやリッチーの父クレイグたちであり、「ヘクターの母は他のギリシャ人のほうを向いて、ギリシャ語で大声で言った。眉をあげ、オーストラリア人 (Australenzi) だもの、しょうがないわ。血筋ってもんね！」(Tsiolkas 21) とあるように、歩けないほど酔っ払っては新移民たちに冷たい目で見られ、嘲笑される存在でしかない。従来の典型的オーストラリア人像として、酔いどれで振る舞いが雑だが、底抜けに明るい「オッカー ocker」があるが、21世紀のオーストラリアでは、楽天的で無責任なあり方は困難なようだ<sup>3)</sup>。ゲーリーについては妻のロージーも、次のようにヘクターの意見を不満ながらも受け入れている。

ゲーリーの父親は根っからの飲酒家だった。母親もそうだった。さらには祖父母まで。最初に四人として船で渡ってきた最初の世代からきつと酔いどれだったんだ。笑ってしまいそうになった。うちの夫って、本当に典型的なオーストラリア人だわ。一〇年も以上の会話の中で耳にしたことを思い出した。ヘクターによれば、オーストラリアの飲酒は他の文化で行われているものとは、極端さと、陽気さの欠如と、夕食の席ではなくパブが中心である点でまったく別物だと言う。その時のことを思い出すたびにそうなのだが、今回もロージーは顔に血が昇ってくるのを感じた。ヘクターって、喋り口には悪意も無いし、態度にも嫌なところはないっていうのに、「オーストラリア人」って一語を、軽蔑をずっしりと込めて口にするのよね。(Tsiolkas 256)

自称画家で読書家のインテリでもあるゲーリーだが、その知識は現実にはまったく役が立たず、他の人間たちを罵倒するためにのみ使われている。イギリスやアメリカに対するコンプレックスを梃子にマイナス要素を自虐的にだがユーモラスに乗り越えてきた「白人」オーストラリア精神は、ここでは文化状況の推移の中でその居場所を失い、まったく余裕のない存在に転落しつつあるのだ<sup>4)</sup>。

もっとも次の引用のように、ユダヤ人であるアヌークたちにしても、先祖の文化を厳格に守っているわけではない。アヌークはインド系の医者でイギリス式のジェントルマンであつたらしいアイシャの父と同様に、出自という以外では、ユダヤ性というものは意識していない、あるいはむしろ嫌悪している。

アヌークは子供の頃、両親について、シドニーでの結婚式に行ったことを思い出した。ボンダイの知らない人の家で、頭を布で覆った女性たちを初めて見た。パースの正統派ユダヤ人とアヌークの家族は付き合いがなかった。その女性たちが怖いと思った。まだ若い女たちもずいぶん歳をとって見えた。

「そうね、正統派ユダヤ人だとベイルを被る女の人もあるもの。私はあの人たちは虐げられているのだと思うわ」とアヌークは力を込めて付け加えた。

「シャミラは頭を覆っていると力を感じるって言うのよ。自信が生まれるってね」

この会話を続けるのは勘弁だわ、とアヌークは思った。またこんな会話をするなんて。宗教や神についての問いが近頃また増えてきたのにはうんざりだ。この新しい世紀になって復活してきた道徳だとか混乱した考えのせいで、だんだん窮屈な気分になってきたこの頃だ。私はまだ子供だった時に、とうに神なんか捨ててしまったのに。無神論の立場が自然だったし、当たり前だと思われてきたのに。現世的な態度でいればいいって。新しい世紀は執拗に、過去を掘り返して迫ってくるようで、それがずっと続くことになりそうだ。二十年早く生まれてきたらよかったわ。それも男に、二十年以上前に。(Tsiolkas 74)

ロージーがイスラム教に改宗した白人である友人のシャミラについて「[ベイルで] 頭を覆っていると力を感じるって言うのよ」と宗教が個人のアイデンティティにポジティブな力を持ちうるのではないかと述べるのに対して、アヌークは従来の進歩派を気取った意見しか思いつかず、それを口にもすることも出来ない。マイノリティであることから来る優越性は親世代のもっていただろうエスニックな文化の実質が捨象された抽象的な根拠しか持っていないことが分かる。

先住民アボリジニを巡る意識はより複雑である。アイシャやアヌークにしても、先の引用にあつたように、イスラム教に改宗してよき夫・父親になったビラルを過去のない気の毒な存在としか見ることが出来ないし、ロージーに至ってはアボリジニと一緒にいるだけで他のエスニシティに対しては（アメリカ黒人やアフリカ人に対しても）感じない根拠のない恐怖に駆られてしまう。

一番最悪なのは、それなのに、いまだに自分が鈍感で、退屈で、愚かな中流階級なままなことなのだ。アボリジニたちのそばにいるといつも落ち着かない気分になった。父親に連れられて街中に出かけた少女の頃、通りでアボリジニと擦れ違つた父の手をきつく握り締めていたあの頃から変わらずそうなのだ。アボリジニの目を正面から覗き込んでしまったら、何か邪悪な、



忌まわしいことが起こるのではないかと怯えてしまうのだ。ロージーの両親の人種差別はさり気なく示される程度で、荒っぽく攻撃的にまでなることは決してなかった。母親は黒人を憐れんでいて、父親は敬意を示す気はまったくなかった。だがそれ以外では、二人とも自分たちの寛容さを自慢してもいた。ロージーの恐怖心は意識と記憶の外から、パースの大气そのものから沁み込むようにして、いつの間にか忍び込んできたものだった。(Tsiolkas 245)<sup>5)</sup>

ロージーの両親はロージーと同じ傾向でなかったと説明されている点は重要であろう。マジョリティ性に安住できた時代には、白人の意識においては、先住民アボリジニは憐れむべき存在であると考えるか、まったく存在を認める必要を覚えないかによかった。ロージーの抱えた恐怖が抜きがたいのは、アボリジニの権利回復が叫ばれ、多文化主義思想の進展と相まって、人種・民族間の違いを気軽に語ることがむしろ困難になったオーストラリアの状況と深く関わっていると考えられる。「意識と記憶の外から」とあるように、抑圧され、意識からいったん追放された差別意識が戻ってきた時、より強力な呪縛を発揮するものとなっている。ロージーは息子ヒューゴには、「すべての感情は正当なものよ」(Tsiolkas 243)と繰り返し教え込みながら、本人がこの教義を実行できていないのだ。

もっともこうしたアボリジニに対する恐怖心は彼女だけのものというわけではない。後の場面で、パブで呑んでくれているゲーリーをビラルとロージーが連れ戻しに行った場面で、軽い暴力をゲーリーに振るったビラルを、白人の男が警戒する様子が描かれる。

ビラルはロージーの後からパブを出てきた男を指差した。男はタバコに火を点けた後で、車の方をじっと見ていた。

「あいつが何してるか分かるかい？」

ロージーは男の方に目をやった。男が誰なのかまったく覚えがない。ロージーは首を振った。「あいつは知らない人に親切にしてやろうとしてるのさ」ビラルは車を出しながら静かに言った。「俺があんたに何もしないかって見張ってるのさ。俺にお前の車のナンバーは憶えたぞって知らせようとしてるんだ。あんたみたいな素敵な白人女性が俺みたいなアボリジニ野郎と何してるんだって考えてるのさ」そう言いながらビラルは身体を前後に揺らしながら笑い始めた。身体をどしんどしんと何度も座席にぶつけながら、あの昔のビラルの陽気な笑いで笑い続けた。(Tsiolkas 287)

ロージーは自身もビラルに対して理由のない恐怖を感じているにも関わらず、男の意識を読み取ることが出来ない。日常の中で張り巡らされたエスニシティについての思考に絡め取られている主体は、そうした思考が無意識であるからこそ、現実、想像を含めた暴力に対して過敏に反応するのである。

ロージーとゲーリーの夫妻が息子ヒューゴに軽い暴力を振るったハリリーに対して裁判沙汰までを起こしてしまうのは、現代オーストラリアにおけるエスニシティを巡るこうした力学が働いているからである。*The Slap* に登場する人物たちは多かれ少なかれ、この力学からの精神的ストレスを受けており、エスニシティ＝アイデンティティというかたちでは安住できないで、現実の選択において妥協を迫られている。第6章の視点人物であるマノリス（ヘクターの父）は比較的安定した自意識

をもち、多様なエスニシティの力学から自由であるように見えるが、世代の違いを考えれば、逆に現代オーストラリアで形成される意識の特徴を強調するためにこの第6章に配置されたのではないかという気がしてくる。また、そのマノリスも息子の妻アイシャが自分に対していただいている感情を読み誤って、手痛いしっぺ返しを受けてしまうことになる。*The Slap* が描き出すエスニシティを巡る状況はどの視点をとってみても、全体を超越するような安定した立場を導き出すことは出来ない。チョルカスの作品にある「謎」とは、作中人物の偏見を含んだ意識を露わに描くことによって、作者の最終的見解といったものは逆に示されていないことからくるのだろう。読者は各人の意識に付き合いながら、解決のない様々な問いの中に宙吊りにされるのだ。

## 2. ジェンダーとセクシュアリティ

*The Slap* の作品世界におけるエスニシティの力学に一層の複雑さを与えているのは、性のテーマの多様な表れかたである。作中では実際の性的行為も多く描かれるが、エスニシティとの関係において重要なのは、一つには、性的な興味・興奮がしばしばエスニックな差異と関連するように設定されていることである。また、世代によって、その度合いが異なることに注目してみたい。もう一点は、女性の「産む性」、あるいは母親としての意識を巡る問題である。エスニシティがもたらすジェンダー役割への期待に対してどのように反応するかを *The Slap* に登場する女性たちは常に問われているように見える。

まずは、エスニックな差異と性的意識の結びつきを見てみよう。ヘクターには美人の妻アイシャと未成年の恋人コニーがいるが、性欲の処理においては以下のように描かれている。

家に戻ると、アイシャが買いだしてきた食料品を片付けるのを手伝ってからトイレに向かった。便器に向かって、猛烈に自慰をする。コニーのことは考えなかった。市場でこっそり見たヴェトナム女の色っぽい尻を思い描いた。一分もせずに行くと、便座にかかった精液を拭き取り、トイレットペーパーを便器に放り込み、小便してから、すべてを水に流した。コニーについてあれこれ空想する必要はない。コニーは俺の中にいるんだから。(Tsiolkas 14)

アイシャとコニーについては主に年齢の違いを意識しているようだが、二人が家庭と恋愛という理想に対応しており、性的処理のみに用いるのには向いていないのだろう、見ず知らずの「ヴェトナム女」を思い浮かべ自慰を行っている。エスニシティがはっきりした指標となり、単なる性的処理とその他の関係は無意識的に区別しようというヘクターの欲求を満たしている。

一方、従兄のハリーはヘクターと違って、エスニシティの差異からくる性的刺激に対してより意識的である。ハリーが愛人のケリー (Kelly) のアパートを訪ねた場面から引用すると、

アパートの中を歩き回るケリーを眺める。小柄で、クッションみたいな肉のついた尻と大きな垂れ下がった胸をしている。色黒でぽっちゃりしていて、サンディの背の高さとセルビア人らしい肌の白さとは好対照だ。二人のギャップがあるからハリーは興奮するのだ。ケリーにしかめ面を向けられると、ハリーはふざけてジーンズのジッパーを下げ、ペニスを握ってしごき始

めた。ケリーは怒った目付きで、子供部屋のドアを閉め、ハリーのところにやってくる。(Tsiolkas 97)

サンディはギリシャ人とセルビア人の混血のモデル体型の美女だが、ハリーを性的に興奮させるのはむしろ一般的には美人とみなされる体型とはほど遠く、「色黒でぽっちゃりし」たケリーのほうであり、より正確に言うならば、サンディとケリー、「二人のギャップがあるからハリーは興奮する」のである。逆に、作中でハリーが二度目にケリーを訪ねた時の場面では、エスニシティにおける差異は性的興奮を殺ぐものとなっている。直前にロージーとゲーリーの家に謝罪に行ったハリーは、4歳になるヒューゴに授乳するロージーを見て、謝罪を跳ねつけられ腹を立てながら密かに興奮する。その後でケリーのところへ向かって、激しく性交渉を迫る。

ハリーは目を閉じた。女の手がシャツの下に潜って全身を撫で始めるのを感じる。手は腹から胸へ移っていき、首筋に柔らかく唇が当たる。ズボンのジッパーが下ろされて、ブリーフのゴムをくぐってケリーの指が入ってきた。ハリーはロージーの顔を、突き出た頬骨、謎めいた青い目を思い浮かべた。ケリーのキスはハリーの唇へと移り、激しくなって、舌が口の中に滑り込んでくる。ハリーは目を開けた。ケリーが頭を上げ、見下ろしてくる。突然、女がひどく醜く、色黒で、ギリシャ人過ぎるように思えた。こいつはロージーじゃない。

女の身体を下ろし、立ち上がると、ベルトを締め直してジッパーを上げた。(Tsiolkas 134)

ハリーのこうした急激な性欲の高まりと減退に、ほとんどステレオタイプのとも言えるエスニシティのイメージが寄与していることは明らかであろう。

男性ばかりではなく、女性のアイシャや世代が下のリッチーの視点からも、エスニシティへの意識は読み取れる。

アートの肌の白さには驚かされた。顔と首、腕は容赦ないアジアの熱気で焼けていた。が、残りの部分は牧歌に出てくる大理石のような色合いだった。アートの肌に並べると、アイシャの身体はいやになるほどに暗い色だった。(Tsiolkas 387)

前腕にケルト柄のタトゥーをした毛深い褐色の肌の男がブロンド女の胸を愛撫していた。南ヨーロッパ系、イタリア人かギリシャ人かな、ヘクターを悪党にしてもっと肉を付けたらこんな具合だろうな。(Tsiolkas 435-456)

アイシャの視点から書かれた上の二つの引用部分では、必ずしもエスニシティが直接性欲をかきたてるきっかけになっているわけではない。ただし、逆に性的対象のもつエスニシティを示す記号が、自らの身体的特徴や欲望のあり方への過剰な意識に繋がっている。性を巡る意識という「自然」や「本能」によるものと考えられがちな領域にも、エスニシティによる差異の網が張り巡らされている様相が見て取れる。アイシャのアートとの浮気について、後に「カンファレンスでのお楽しみファックで、幻想であって、現実じゃないわ」(Tsiolkas 420) という友人アヌークの発言が出てくるが、「幻想であって、現実じゃない」という言葉は一見重要ではない、というように見えて、かえってエキ

ゾチックなエスニシティが関わる欲望がアイシャの（またアヌークの）意識に深く根付いているとも取れる。

ロージーのアボリジニに対して抱く感情はさらに根深く、複雑である。先に引用したパブでの場面の後、ビラルに家に送ってもらったロージーは台所で恐怖と快感が入り混じった感情に襲われる。

ビラルがロージーとヒューゴを家まで車で送ってくれた。ロージーが車を運転しなくていいようにだ。あんた、酔っ払ってるだろ。ロージーは子供をベッドに寝かせてから、台所に戻った。ビラルがタバコをふかしていた。興奮がロージーの全身を走り抜けた。ビラルから夜が匂ってきた、アドレナリン、汗、きつくて我を忘れそうな匂いだ。ビラルはロージーの家の台所を、その顔、ザラザラした肌、キラキラ光る黒い目で満たした。すごくハンサムで、同時にすごく醜い。もし私があんたにひざまずいたらどうする？、と突然ロージーは思った。あんたのチンポをしゃぶり出したら？ あんたのチンポをしゃぶったら私を少しは好きになってくれるの？ ゲーリーのポルノビデオの音声が蘇ってきた。あんた、黒いチンポが好きなのかい？ 俺のでかくて黒いチンポがしゃぶりたいんだろ？ (Tsiolkas 287)

最後の部分のポルノのせりふのように、すべてが陳腐で、ステレオタイプ化された感情ではある。ただし、普段の日常を突き破るようにして、エスニックな差異と性的意識の結びつきが突出してくるのは、そうしたメディアにも流通し尽した、どこにでもありがちな固定的イメージを契機としてであるという点は注目に値するだろう。むしろ、こうした感情は陳腐であるからこそ日常の裏側に貼り付いてなかなか消えることがないのだ。

次に、ジェンダー役割とエスニシティの関わりについて検討してみよう。アイシャはハリーとの和解を求める夫ヘクターに子供のことを持ち出されて動揺を見せる。

一瞬パニックになって、めまいを起こしそうになった。自分の子供にも関わることなのだ。アダムとメリッサは私のものであるのとは別の意味でもヘクターのものなのだ。夫と子供は親類を通じて、アポストルス家の親族ネットワークによっても繋がっている。私はそこには入っていないのだ。もしアイシャの母親がメルボルンに暮らしていても事情は変わらない。母親は子供や孫の周辺だけで自分の人生を過ごすのには耐えられないに違いなかった。母には診療の仕事もあるし、友人との付き合いや自分の趣味もある。家族は彼女にとっては人生の一部ではあるが、すべてではなかった。アイシャはそれを賢明な選択だと思ってきた——人生はそうあるべきなんだ。アイシャは家族と大陸ひとつ分離れていても生きていけた。ヘクターには無理だ。結婚してからこのことに気付いたのだった。ヘクターと一緒にいると同意した時点で、ヘクターのすべてとも付き合っていかなければならなくなったわけだ。しかし、その事実に対する腹立たしさがアイシャから消えたことはなかったし、子供たちがその腹立たしさを理解してくれないだろうことも思い知らされていた。(Tsiolkas 387)

全面的に母親としての役割を求める従来のギリシャ系文化の圧力を感じながら、アイシャは親友ロージーに対する忠誠心や自分自身の家族から受け継いだ思考法を捨てることが出来ない。しかし、子供たちが自分の側につくことが無いことも分かっている。先に歴史・エスニックな文化の欠如を



理由に白人であるロージーを憐れんでいたアイシャだが、ここでは、よりエスニックな要素の濃いギリシャ文化によって合理主義的な思考法を絡め取られてしまう。

もう一例あげてみる。20歳年下の恋人の子供を妊娠したことが分かったアヌークは産婦人科から仕事場へと移動するタクシーの中で会話となった運転手に妊娠したのだと告げるが、祝福の言葉を口にした運転手に対して怒りをぶちまける。後にそのことを反省する場面で、子供を産むつもりにならない自分を再確認しながら、普段は「タクシー運転者はいつも移民の男たちで、彼らを敬意と尊厳をもって扱うことで、無意識に人種差別的なオーストラリア人たちとは別なんだと示せるのだと、いつも自分に言い聞かせている」(Tsiolkas 62)という自分がどうして急な怒りに駆られたのかを分析する。

目をきつく閉じ、子供を求める気持ちを奮い立たせようと、子宮の中で生命が育っていることからくるかもしれない達成感を実感してみようと試してみた。ごめんなさいね、とアヌークは囁いた。これだけじゃ、十分じゃないの。午後の若いタクシー運転手に示した卑しい振る舞いが頭に浮かんで来て、愕然となった。あの男が自分たちと違うということに苛立ったわけではなかったのだ。訛りだとか、髭だとか、容赦をしない神だとかとは、まったく関係がなかった。アヌークに恥の意識を感じさせたのは、彼がまったく違わない存在だったからなのだ。運転手が世界全体を代弁していると勝手に思ったからなのだ。(Tsiolkas 65-66)

このアヌークの自己分析には差異と同一性を巡るエスニシティの力学の捉えがたさ、また、現実における意識においてそれがどのように表れるかの予測しがたさがよく表れているように思われる。運転手のエスニシティによって露わになった差異が逆に「世界全体を代弁している」、主体を上から見下ろして判断を下す全体的な視線を招きよせているのである。

セクシュアリティとジェンダー役割を中心とした、性欲、出産、家族を含む問題系は、多文化主義という社会・文化的背景において、暴力や偏見をも巻き込むかたちでダイナミックに変遷を続けている。エスニシティは人々の織りなす人生の、すでに不可欠な横糸として織り込まれており、意志を越えた感情をかきたて、また、重要な選択を迫るものとして折々に前景化される。*The Slap* が登場人物の思考と感情を剥き出しにして描き出すのは、そうした状況が一般化した現代オーストラリアの様相なのだ。

### 3. 世代

*The Slap* の物語的展開の中心はハリーがヒューゴを叩くことから起こる様々な波紋であるが、もう一つの重要な筋は、リッチーとコニーが自分たちの欲求と欠如感をどのように折り合いをつけていくかという、若い世代、高校最終学年という微妙な時期にある登場人物たちの一種の成長物語である。コニーとリッチーが視点人物となる章が中間に当たる第4章および最終章に当たっていることは、作品全体の物語的ダイナミズムの上で見逃せない。*The Slap* の読後感が単なる異なった見解・世界観を味わったことによる困惑に終わることがないのは、この全体的な構成によるものだろう。また、第6章のマノリスの視点も、一世代下のヘクターたち、それよりも下のコニーたちの世界観を

相対化する機能を果たしていると考えられる。1960年代からの東欧・南欧からの急激な移民の増加、1970年代からの国家政策への多文化主義の導入によって、「白豪主義」オーストラリアは20世紀末に向けて大きな文化的転換を果たした。ヘクターやアイシャの世代はこの転換期の申し子と云ってよいだろう。また、移民第一世代として同じ変化を経験したマノリス、大きな変化の後に育ち21世紀にティーンエイジャーとなったコニーやリッチーもまた、この文化的転換をどのように受け止めるかを日々模索していると言える<sup>6)</sup>。ここからは、エスニシティとセクシュアリティを巡る主題に世代という視点を導入することで何が見えてくるかを検討したい。

移民第一世代と第二世代の間のジェネレーション・ギャップにおいて焦点となるのは、家族、それも核家族ではなく親戚縁者を含んだ家族に置く価値の重みだ。この点で第一世代をもっともはっきりと体现しているのは、マノリスの妻クーラである。教師をしている娘エリサベト（Elisavet; ヘクターの妹）とオーストラリアの教育制度について軽い口論になった後で、その場にいないアイシャを責める言葉は容赦がない。

「で、あのインド人の女は？」

「彼女にも名前があるでしょ、ママ」

「来るのかって訊いてるのよ」

「来ないわ」

クーラがテーブルをバンと叩いた。「あの女は私を苦しめるために地上に送り込まれてきたんだわ。毎日、私の哀れな息子はなんであのインドの悪魔に引っ掛かったんでしょうかってマリア様に訊ねてるのよ。どうしてなんですかってね」

マノリスは首を振った。アイシャはヘクターにとって素晴らしい妻だ。利口で、何でも出来て、魅力的じゃないか。俺たちはツイてるんだ。こいつにはそれが分からんのか？（Tsiolkas 330-331）

文化的許容度はほぼ感じられないクーラに対して、マノリスは引用の最後にあるように冷静である。ただし、実際のところは、息子世代に対する戸惑いの念はクーラとそれほど変わらず、アイシャに対する個人的な好意から彼女が最終的には妥協してくれると思いついていただけであったことが後に露呈される。ハリーの付き添いとして裁判所に行ったマノリスはそのことをアイシャに糾弾されて混乱する。

「あなたはあの男と一緒に裁判所に行ったんでしょ、ロージーが教えてくれたわ。とってもショックだったって」

これは不意打ちだった。もちろんハリーについて裁判所へ行くに決まってる。こいつら頭のおかしいオーストラリア人の女どもは何を期待してるんだ？ あいつの両親はもう亡くなっているし、妻の甥っ子の面倒を見てやるのは俺の当然の義務じゃないか。裁判所に行かなかったりしたら、クーラのやつは兄貴の子供を放っばり出したと言って絶対に許してくれないだろう。そのことぐらいアイシャも分かるはずだ。とんでもない野蛮人じゃないんだから。忠誠心だと道義心だとかをわざわざ思い出させてやらなきゃならんのか？（Tsiolkas 337-338）

穏かな老人としてアイシャに対しようとするマノリスだが、アイシャの「髪の毛を掴んで、顔をテーブルに押し付け、小さな女の子のように打ち据えてやりたかった」とあるように、内面ではこの息子の妻とどこまでも折り合うことのない志向を抱えている。

マノリスの章では家族の中の差異だけではなく、オーストラリア社会における文化的変遷にも焦点が当てられている。章の始めで、同じギリシャ系第一世代の友人の葬式に参列する場面がある。当然、移民したての時代についての会話に花が咲き、また同時に子供たち世代には自分たちの文化が伝わらないという不平が述べられる。ここにあるのは、過去を理想化してノスタルジアをもって見る、どこにでもある老人の視点だろう。面白いのは、マノリスによってこのノスタルジアがギリシャ系としての自文化だけではなく、オーストラリアのマジョリティ文化についても向けられる点である。

エマヌエルの隣には、スタヴロス・マヴロギアニスがいた。昔と変わらず洗練された顔つきだが、贅肉がついてしまっていた。髪はふさふさで漆黑だった。染めてやがるな。スタヴロスのオーストラリア人の妻サンドラはすっかり白髪になっていたが、部屋にいる他の女たちとは違って、それを隠そうともしていなかった。いまだにたいした美人だ。みんな女神みたいに見えたもんだったな、オーストラリア人の女たちは、若い頃に俺たちが見た時には——背が高くスリムで、金髪で、男まさりで。オーストラリア人の女に何が起こったんだ？ いまはみんなでっぷりと牛みたいじゃないか。サンドラはいまだに優雅で、背筋もピンと伸びていた。七〇年代には完璧なギリシャ語をマスターしてみんなを驚かせたものだった。(Tsiolkas 399)

マジョリティである「白人」と新移民である自分たちという二分法がマノリスの中では牧歌的とも言えるかたちで残っており、過去の「白人」を理想化さえしている。チョルカスはマノリスを全般としては同情的に描いているが、以上のような固定的な思考のあり方は変わる可能性があるように思われる。そのことがかえって、後の世代の不安定な精神のあり方を読み解くための指標として、作中では働いている。

次に、ヘクターやアイシャたちよりさらに若い世代の世界観を見てみよう。以下の引用はリッチーが長年疎遠になっていた父と会話する場面で、世代間の違いがよく見て取れる。

「どのぐらいつきあってるんだ？」

テーブルにドンと音を立てて置かれたので、リッチーのグラスからビールが零れそうになった。「ガールフレンドなんかじゃないよ。コニーには彼氏がいるからな」

「誰だい？」

「アリさ」

「アラブ人か？」

『ドーン・オブ・ザ・デッド』の国にいるのだ。もう食べられたほうがマシだな、とうんざりして思った。腸と心臓と胃を引き裂いてもらってさ。そうすりゃ俺もゾンビになれるのにな。

「その何が悪いんだ？」

ジーザス・ファッキン・クライスト  
「おいおい止めろよ、リック」父親は怯んだ素振りを見せた。向きを変えようとして、脚をテーブルの脚にぶっつけた。やれやれ、やっと脚を閉じてくれたか。「何か意図があって言ったわけ

じゃないさ。コニーがどこかのアラブ人とやってようが、俺の知ったことかよ」

「オーストラリア人だよ。メルボルン生まれだからな」

「俺の言ってることは分かるだろ」

「まあね」リッチーは指を魔法の杖のように振りながらパブの中を示してみせた。「父さんの言いたいことは分かるさ。あんたはアラブ人もアジア人も黒人もホモも、ここのゾンビばっかの郊外に住んでる退屈な白人連中以外は嫌ってるってことだろ」リッチーは椅子で前後に身体を揺すった。「ジョン・ハワードに投票したんだろうねえ」

「で、いまは好景気なんだぜ、マイト。金がウジャウジャと回ってるからな」クレイグはマシンガン射撃のように単語をぶつけてくる。「誰に投票しようが俺の勝手だろうが」

リッチーは何も答えなかった。携帯電話を取り出して、コニーにメールを送る。ゾンビが来る、ゾンビが来るよー。それから目を上げる。(Tsiolkas 432)

リッチーにとっては、父が当然のように生きている「白人」中心の世界観はゾンビ映画のようにおぞましいと同時に滑稽なものでしかない。逆に、「何か意図があって言ったわけじゃないさ」と言うように、父のほうではそうした世界観は自然なものとして染みついたものなのだ。

さらに上の引用では、自由党の党首として1996年から2007年にわたり首相をつとめたジョン・ハワードの名前に言及されているのも重要だ。極右政党が人気を集めるような反動的流れに乗って政権を握り、長らく多文化主義政策を進めてきたオーストラリア政権の方針を大きく方向転換したのがハワードである。リッチーと父の対立には個人的嗜好以上のオーストラリア社会でのエスニシティを巡る闘争が反映している。リッチーは多分に空想的ながら、趣味の物語づくりで異文化間、異人種間の交流という主題に対して思考しようと試みている。

リッチーは最初のノートを開けて、続きを書き出した。プリアムはトロイの敗北した戦士たちが逃げて辿り着いた場所だ。新しい大陸を発見して、誇り高い先住民たちと交配し、自分たちの新しい世界を旧世界での最後の王にして支配者であった人物の名前で呼ぶことにしたのだ。一種のローマを建国したわけだが、あの有名な古代都市とは違って、プリアムのトロイ人はアジアとヨーロッパの歴史からは一〇〇〇年の間に渡って消えていたのだ。リッチーはトロイ人とアボリジニたちの異種間結婚の物語でノートのページをびっしり埋め尽くし、その豊かで肥沃な王国に独特の動物相や農作物などを詳しく描写していた。(Tsiolkas 445)

もちろん、エスニシティや植民地主義に対する最終的な解決は示されようがないが、コニーやリッチーの思考には従来のエスニシティを巡る思想的枠組みから抜け出そうとする意志が意識的にも無意識的にも強く働いている。作品の最後で描かれるロック・フェスティバルでのリッチー、コニー、アリ、レーニン、ジェナの5人は祝祭的雰囲気とドラッグの効果に助けられながらも、自分たち世代のあり方を掴みつつあるように思われる。その意味では、先行世代の軋轢を中心として開始される *The Slap* は、未来に向けて明るい展望を示して終わる、ハッピーエンドの小説であると言えるだろう。



## 終わりに

ヘクターやアイシャの世代に対しては容赦なく心理的醜さを暴いていくチョルカスの筆致は、一世代前のマノリスの世代、また下のコニーやリッチーの世代に対しては、よく言えば同情的、悪く言えば甘いように感じられる<sup>7)</sup>。これは作者のエンターテイナーとしてのバランス感覚が働いている部分もあると思われるが、移民第二世代が抱くエスニック文化へのノスタルジアと、未来の世代への期待が反映されてもいるだろう。同時に視点の分散によって、最終的な作者の判断が示されないことで、個々の登場人物の思考や行動に対して読者自身がひとつひとつ考察してゆくような開かれた作品にもなっている。エスニシティが日常においてどのような意味作用を及ぼすのかについては様々に理論的考察をすることが可能であろうが、まさに日常レベルで、また具体的な現在のメルボルンという場に即して体感されるように書かれているという点に、*The Slap* の小説としての新しさと刺激があると思われる。

## 注

- 1) チョルカスと同じギリシャ系オーストラリア作家である John Vasilkakos はチョルカスの初の伝記の “Introduction” において、繰り返しこのフレーズ (“Tsiolkas Phenomenon”) を用いて、チョルカス作品が引き起こしてきた反響の大きさと、それにもかかわらず掴みきることのできない作風を指摘している。
- 2) 作品の冒頭 “His eyes still shut, a dream dissolving and already impossible to recall, Hector’s hand sluggishly reached across the bed. Good. Aish was up. He let out a victorious fart, burying his face deep into the pillow to escape the clammy methane stink. I don’t want to sleep in a boy’s locker room, Aisha would always complain on the rare, inadvertent moments when he forgot himself in front of her.” (Tsiolkas 1) において、下線部は描出話法といえるだろう。*The Slap* ではこのように、作品全編において、地の文に描出話法での内面描写が織り込まれており、読者は各章の視点人物の思考にその偏見や勘違いに至るまで寄り添って読書体験を進めることになる。
- 3) 「オッカー」の表象は Bruce Beresford 監督の *The Adventures of Barry McKenzie* (1972) などオッカー・コメディ映画のジャンルに典型的に見ることが出来る。歴史を参照すれば、「オッカー」は最初の典型的オーストラリア人像となった「ブッシュマン bushman」(19世紀末にブッシュ (bush) を季節労働者として渡り歩いた男たち) まで遡ることが出来るだろう。白人 (特にアングロ・ケルティック) を中心とした文化におけるオーストラリア人のアイデンティティを支えてきたこうした表象は、メディアでは戯画的にとり上げられることもあるが、実際のオーストラリア人のアイデンティティ・ポリティクスの中では急速に無効になりつつあるようだ。
- 4) ガッサン・ハージはオーストラリアにおける「白人の植民地的パラノイア」を英国の自国中心主義と階級制度から辿って、以下のように分析する。「はたして自分は、白人性に値するような生活を送ることができるのだろうか？ 白人性が約束するように文明化することが、自分にできるのだろうか？ 白人性は約束を果たしてくれるだろうか？ こうした疑問にあっさり「ノー」という答えが返ってくるのではないかという無意識の恐怖が、白人の植民地パラノイアを構造化したのである。白人性をもつとされる潜在的可能性が、階級的リアリティのために覆され、実現しないのではないかという絶え間ない恐怖をもたらす。そして白人性は、この内在する強迫観念をつねに外的な原因に投影しようとする。オーストラリア入植者が持ち込んだのは、階級的特性をともなったこうした構造的傾向だった。」(ハージ 12-13) 「白人」として辛うじて守られていた特権からも落伍しようとしているロージーとゲーリーの夫妻の周囲への精神的コンプレックスと攻撃性も、このような精神的構造に大きく由来すると思われる。また、ヘクターやハリーらギリシャ系の成功者たちと彼女たちの間に起こる摩擦は、塩原良和が以下のように指摘するように、現今のグローバリゼーションの中での多文化主義の変容にも因っている。「アジア系専門職・ミドルクラス移民を礼賛し、かれら [従来のオーストラリアのマジョリティである「白人」] 自身も唱道する多文化主義は、ネイションに包摂されるべき人と排除されるべき人の境界線を白人と非白人のあいだにではなく、

グローバル資本主義に有用な人と、そうでない人とのあいだに引きなおす。白人（＝主流国民）であろうがなかろうが、グローバル資本主義にとって有益な能力をもったクリエイティブな人材は包摂されるべきで、優位な人材でなければ排除されるべきというのが、ミドルクラス多文化主義の支配的言説である。」（塩原 110）

- 5) この点についても、ハージの指摘が示唆的である。「先住民族の殺戮がなされてからずっと後になっても、オーストラリア文化のうちに「白人の植民地パラノイア」を見出すことができるのだ。ここでパラノイアというとき、それは恐怖の病理学的形態のことである。それは、常に脅かされている極端に脆い自己認識に基づいている。それはまた、何も驚異の存在しないところに脅威を感じる傾向のことである。よしんばそこに何かがあるとしても、それが自己に危害をくわえる能力を過大評価して、脅威を感じるのだ。こうしたオーストラリアの植民地パラノイアの中心的要素は、ヨーロッパ性もしくは白人性の喪失という恐怖である。」（ハージ 9）
- 6) 有満保江は「アイデンティティ」概念に焦点を当てオーストラリア文学を通観した研究において、次のように述べている。「一九九〇年以降のオーストラリア文学は、かつて「非主流」「周縁」に位置していた人びとの存在に焦点が当てられるようになっていく。入植以後、白人社会から排除されていた「先住民」、かつての「白豪主義政策」によって排斥されてきたアジア人をはじめとする「有色人種」、世界各地から訪れる「非アングロ・ケルティック系移民」、さらにはオーストラリア社会からその存在がないがしろにされた（とされる）「女性」の存在がクローズアップされるようになる。「ヨーロッパ／白人中心主義」や「男性中心主義」によって一元化されていたオーストラリア文学に多様化の波が押し寄せたのである。かつてはイギリスの「亜流」とされていたオーストラリア文学は、「ポストモダン」「ポストコロニアル」と呼ばれる現代において、「ハイブリッド」という新しい概念を世界に「発信」する立場へと変わりつつある。しかし「ハイブリッド」の「アイデンティティ」を表彰する文学はまだ実験段階にある。「複合的なアイデンティティ」の追求はこれまでになかった問題をオーストラリア文学に提示すると同時に未知の可能性を秘めている。」（有満 4-5）*The Slap* はこの「ハイブリッド」の「アイデンティティ」を表彰する文学」の成果であるとともに、テレビドラマシリーズ化され、アメリカ、ヨーロッパ、南米、トルコやイスラエルでも放映されるに至ったことを考えれば、グローバルに通用するすでに実験段階を抜け出した作品であると思われる。ただしもちろん、ハイブリッド化されたアイデンティティが完成された形で示されているという意味ではなく、そうしたハイブリッド化が絶えざる過程として、オーストラリアに生きる（また、恐らくは現今の世界を生きる）人々のアイデンティティを巻き込んでいることを当然のこととして描き出しているという意味においてである。
- 7) ただし、2005年12月にシドニーの郊外クロヌラ（Cronulla）で発生した白人の若者による一連のレバノン系移民襲撃に見られるように、現実には都市部の若い世代においても、マジョリティ／マイノリティ間には緊張関係がないわけではない。

## 参考文献

- Tsiolkas, Christos. 2008. *The Slap*. Crows Nest: Allen & Unwin.
- 有満保江. 2003. 『オーストラリアのアイデンティティ：文学にみるその模索と変容』東京：東京大学出版社
- ハージ, ガッサン. 2003. 『ホワイト・ネイション：ネオ・ナショナリズム批判』保莉実・塩原良和訳, 東京：平凡社 [原著 Hage, Gassan. 1998. *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*. Sydney: Pluto Press.]
- 塩原良和. 2010. 『変革する多文化主義へ：オーストラリアからの展望』法政大学出版局.

(本学理工学部非常勤講師)